

成田裕一の略歴

昭和7年3月4日 父幸吉（北秋田市李岱で出生）、母リキ（大仙市協和船岡上一の渡で出生）の長男として秋田市新中島本町一番地で生まれる。父は秋田営林局職員

昭和10年 一家は秋田市亀の町の借家に引っ越しした

昭和13年4月 秋田市中通小学校に入学 虚弱児童で体育は見学、理数以外は成績も良くなかった

昭和19年4月 秋田市立中学校（現在の秋田中央高校）に入学

昭和22年 全校マラソン大会で18位に入ったことから駅伝部に勧誘され入部

昭和23年4月 学制改革で秋田市立中学校が秋田市立高等学校となり、その2年となる

昭和24年10月16日 全県駅伝大会に秋田市立高等学校選手として出場し、刈和野と羽後境の間12kmを走った。3位で受け、3位で渡した

昭和25年3月 秋田市立高等学校卒業 同年5月 秋田大学鉱山学部鉱山電機学科電気課程入学

昭和29年3月 秋田大学鉱山学部鉱山電機学科電気課程卒業。同年4月1日 北海道炭鉱汽船株式会社（以下北炭と略称）に入社、幌内炭鉱の電気係として勤務

昭和31年4月 北炭の幌内鉱業所万字炭鉱に転勤 電気係として勤務

昭和32年3月17日 矢口ノブ子と結婚 昭和33年2月に 長男淳誕生

昭和35年6月30日 たった一人の實が亡くなったため、故郷に帰ることを決意した。6年3ヶ月の間一日も休まずに大きな怪我もなく坑内電気係を勤めた北炭を円満退社。

昭和35年9月から11ヶ月間 秋田県立花岡工業高等学校（現在は秋田県立大館桂桜高等学校）に臨時講師として就職したが、教員免許を持っていなかったため、法政大学の通信教育生となり教員免許取得に必要な20余単位を取得した。

昭和36年8月 秋田大学助手鉱山学部採用される。門脇又男先生（故人）と赤上陽出男先生（故人）の指導で放電の研究に従事した。真空管を使って放電電流の極性判別装置を自作した。これがデジタル技術学習の始まりであった。昭和36年12月に長女紀子誕生

昭和38年5月から昭和39年2月まで 文部省内地研究員として北海道大学に留学し、北海道大学工学部原子力施設の小澤保知教授（故人）のもとで「ガイガー計数管の偽放電」の研究に従事した。放電パルスの発生時間分布を計測するための電子回路を自作し、この年の秋の電気学会東北支部大会で発表した。この装置の主回路は現在のコンピュータの1ビットを記憶する回路そのもので、1ビットの記憶素子は12AU7という双三極管であった。このとき身につけた技術は、後年のマイクロコンピュータの応用研究に大きく貢献した。

昭和39年4月 秋田大学講師鉱山学部（電力工学）に昇任。研究テーマは相変わらず放電現象であったが、その計測のため、電子回路を組み込んだ測定器を自作した

昭和40年10月から12月まで、日本原子力研究所ラジオアイソトープ研修所に入所

昭和41年12月 第一種放射線取扱主任者試験に合格し、第一種放射線取扱主任者となった

昭和43年4月 秋田大学助教授鉱山学部（電力工学）に昇任

昭和49年4月 電気工学科から昭和48年に創設された電子工学科に移籍。この頃から出現したマイクロコンピュータに関心を持ち、これを学生の教育・研究に利用すると共に、秋田県内の企業人や一般市民のための講習に活用した

昭和50年12月 北海道大学より、「ガイガー計数管の偽放電」の研究で工学博士を頂く。主

査は小澤保知先生（故人）

昭和51年4月 秋田大学教授鉱山学部（電子機器学）に昇任。兼務で秋田大学放射性同位元素センター室長に就任

昭和56年9月29日から同年11月28日まで 文部省短期在外研究員として米国に出張、カリフォルニア大学バークレー校のカプラン教授もとで放射線計測の研究（6週間）、ミシガン大学研修（1週間）、ロスアラモス研究所研修（1週間）

昭和57年4月21日 父幸吉が肺炎のため77歳でこの世を去る

昭和57年12月 玉本英夫助教授（現在は秋田大学名誉教授）と共著で日刊工業新聞社より「マイコンプログラミングの基礎」を出版

昭和57年 これまで個々のデータ処理のために自作してきたプログラムを基に、汎用性のあるリレーショナルデータベースシステムを設計・製作した。後年NDBSと名付けた

昭和58年5月 日刊工業新聞社より単著「パソコンによる電子回路演習」を出版

昭和58年 この頃から健康や医療の分野にパソコンを利用、滝澤行雄先生（秋田大学名誉教授）の指導でNDBSを基に秋田市民のための「生活活動診断システム」を制作した。また、竹本吉夫先生（故人 元、秋田赤十字病院長、日本赤十字秋田短期大学学長）と、医療情報システムの共同研究を始め、看護学生や看護職員の医療情報処理教育を始めた

平成2年4月 創設された情報工学科に移籍し、初代学科主任となる

平成3年6月より 秋田大学評議員を2期4年間務める

平成6年5月17日 母りきが、脳溢血のため85歳で この世を去る

平成6年6月 米国サンアントニオで開催された看護情報国際会議（NI94）で、私が指導した秋田赤十字病院の二人の看護師さんが共同研究の成果を発表した

平成7年1月17日 阪神・淡路大震災が起きた日に、秋田赤十字病院で直腸がんの手術をして頂く。執刀は、今は大腸癌内視鏡手術の世界的権威である工藤進英先生でした

平成7年4月 教え子が設立したフューチャ・エレクトロニクス株式会社（情報処理業）の株主の一人となり、技術指導を始める

平成7年7月 カナダのバンクーバで開催された医療情報国際会議で研究発表

平成7年10月 秋田大学工学資源学部附属鉱業博物館の標本データベースシステムをNDBSを用いて制作した。このシステムは平成8年に公開し、停年後も倉田雄二郎氏と共にサイエンスボランティアとして、改良と保守を続け、現在に至るまで24時間稼働している

平成9年3月 新設された情報工学博士課程専攻の、私の研究室に在籍していた佐藤和人さん（現在は秋田県立大学教授）と阿部清子さん（米国在住）が、僅か3年間で研究成果を纏め、博士号を取得してくれた。

平成9年3月31日 秋田大学を停年退官し、秋田大学名誉教授の称号を頂いた。

平成9年4月1日 聖霊女子短期大学教授となり、教員の情報科学研究指導と、学生の情報科学教育を担当した。

平成9年9月 スウェーデンのストックホルムで開催された看護情報国際会議（NI97）で研究発表。共同研究者として秋田市立総合病院の看護師さん達も出席した。

平成13年8月 ロンドンで開催された医療情報国際会議で研究発表

平成14年3月31日 聖霊女子短期大学を退職

平成16年9月 サンフランシスコで開催された医療情報国際会議で研究発表

平成16年11月より 毎週金曜日、秋田県立博物館名誉館長で元秋田大学長の新野直吉先生

のご指導で、「菅江真澄と鉾山のデジタル記録」について学習を始めた。この記録に用いたシステムもNDBSである。なお、この学習を始めた翌年に県立博物館から「真澄クイズ」というゲーム機の制作を依頼され、2台制作し現在まで無故障で稼働している

平成20年11月1日 妻ノブ子が膵臓癌のため72歳でこの世を去る

平成22年3月14日 散歩中に半盲状態になり、秋田県立脳血管センターに緊急入院。不整脈が原因の心原性脳梗塞によるもので、2週間入院したが後遺症もなく回復したが、鬱状態になり精神科医の治療も受けたが回復、発病後中断していた車の運転も再開した

平成23年11月3日 瑞宝中授章を受賞

平成24年9月13日 秋田県鉾山資料館等連絡協議会と日本鉾山史研究会が主催した、第3回秋田県鉾山サミットで、「菅江真澄と鉾山のデジタル記録」のテーマで研究発表

平成27年8月4日 菅江真澄研究会平成27年度の第一回学習会で「菅江真澄と鉾山－真澄は坑内に入ったか－」のテーマで研究発表

平成30年8月7日 菅江真澄研究会平成30年度の第一回学習会で「真澄は男鹿で坑場の跡を見たか」のテーマで研究発表

平成31年4月2日 菅江真澄研究会平成30年度の第八回学習会で、与えられたテーマ「私の好きな真澄」で研究発表

令和元年7月13日 菅江真澄研究会総会で理事に推薦され承認された。

平成31年7月13日 成田裕一（満87歳）

<http://www.ndbs-ahps.jp/narita/xindex.htm> mail: nnarita@plum.plala.or.jp